

目次

情報通信サービスのLCA	1	検証とLCAの今後の方向性	4
LCA日本フォーラム活動報告	2	「エコリーフ環境ラベル」が6月より国内本格始動	7
韓国のLCA	2	インターナショナルジャーナル・オブ・LCAから	9
「ソーシャルLCA」と「ダイナミックLCA」の		LCAインフォメーション	10

シリーズ：私の考えるLCA

情報通信サービスのLCA

日本電信電話株式会社
NTT生活環境研究所所長 山田 一郎

誰が考えてもLCAに違いはないと思うのだが、人によってLCAへの期待が大きく違うのかもしれない。そう考えることにして、LCAへの期待を述べてみたい。

情報流通社会あるいはIT企業において、LCAは2つの意味で重要になっている。1つは従来から行われている製品や設備(ハード)のLCAであり、1つは新しい情報通信サービス(ソフト)のLCAである。NTTグループでも、通信設備を用いて事業活動を営むために少なからずエネルギーや資源を消費しており、この事業活動に伴って発生する環境負荷を把握するために、通信設備のLCAは不可欠となっている。一方、IT革命と言われるように、ITの進展は既存の社会システムやライフスタイル(生活様式)を大きく変革する可能性をもっている。このため、新しい情報通信サービスが環境にどのような影響を与えるかを、言い換えれば、ITの進展によって環境にやさしい社会システムやライフスタイルが実現できるかどうかを把握するためにも、今後は、情報通信サービスのLCAが重要になると考えている。

さて、情報通信サービスのLCAについての具体例を1つ2つ示してみたい。情報通信サービスの特徴の1つは「移動の削減(物流から情流へ)」である。TV会議、遠隔教育・医療などのサービスが具体例で、情報通信によって人や物の移動が削減されることで、交通・輸送機関による環境負荷を大幅に削減することが期待できる。LCAの手法を適用することで、“TV会議システム”では、出張会議に比べて、エネルギー消費量で75%、CO₂排出量で85%が

削減できることが明らかにされている。また、NTT東日本では“STARTS”という衛星通信を利用した遠隔研修システムを運用しているが、従来の集合訓練に比べて、CO₂排出量を1/5～1/10に削減できることも明らかになった。情報通信サービスの特徴のもう1つは、「脱物質化」である。これの具体例としては、電子図書、カラオケ配信システム、VOD(ビデオ・オン・デマンド)が挙げられる。いずれのサービスも、文字や音楽、映像といったコンテンツを電子化して配信するもので、従来の紙やCD、DVDなどの記録媒体を物理的に輸送するシステムに比べると、何十倍もの情報を瞬時に配信できるのに加えて、脱物質化による大幅な省エネルギー・省資源が期待できる。“インターネット電話帳”では、従来の紙の電話帳に比べて、紙の製造エネルギーが不必要となるので、エネルギー消費量を1/90に削減できることが明らかになっている。

このような情報通信サービスのLCAはまだ緒についたばかりで、不十分なところも多い。情報流通サービスが普及することによって生じるリバウンド効果の取扱いもその1つである。例えば、業務の効率化によって生まれた時間が他の活動に使われて、新たなエネルギーや資源の消費を促すことなどである。しかしながら、具体例を示したように、情報通信サービスのLCAを進めることによって、情報通信サービスが単に我々の生活を便利で快適にするだけでなく、環境負荷の低減にも貢献することが明らかになりつつある。新しい情報通信サービスとして、“B2B”や“B2C”といった電子商取引、ITS(高度道路交通システム)やSCM(サプライ・チェーン・マネジメント)などが続々と登場しているが、これらのサービスが環境にやさしい社会システムやライフスタイルを実現することへの期待も大いに高まっている。このような機運に水を差さないためにも、新しい情報通信サービスについてのLCAを積極的に進めるべきだと考えている。将来的には、これに止まらず、経済・産業活動を支える社会システムや個人のライフスタイルを評価できる総合的なLCAへの展開を望みたい。